

[チリ]

日本からチリ、中南米に 広がるリハビリ技術協力

JICAがチリで行ったリハビリ技術向上のための協力の成果が、
中南米地域に広がりつつある。

文・写真 = すずき ともこ(フォトエッセイスト)
text & photo by Suzuki Tomoko

Close Up!

ジャイカの
あしあと



チリの首都サンティアゴ、閑静な街中に1軒のリハビリテーション施設がある。正門をくぐると「JICA」のロゴが入った2台のバンと救急車、中型バスが止まっていた。地元の人々が病院と言うこの施設は決して大きくはないが、中庭には緑が茂り、誰もがくつろげる癒やしの空間だ。ここはJICAが2000～05年にリハビリ技術や施設運営の改善を支援したペドロ・アギレ・セルダ国立リハビリテーション研究所（INRPAC）の病院である。

この病院は0～25歳までを対象に、通院、入院、ガイダンスといろいろな形のケアがなされている。生まれながらに障害があったり、交通事故などで体が不自由になった子どもたちが、スタッフと一対一でさまざまなアクティビティを取り入れた治療を受けている。

「現在、施設に日本人は一人もいませんが、5年間で専門家や青年海外協力隊員から学んだ治療や施設運営のノウハウは、チリ全土の病院にも受け継がれ、チリ全土の病院にも影響を与えました。昨年からは新たに第三国研修という形で、日本から学んだ技術や知識を周辺諸国とも分かち合い、中南米地域全体のリハビリ医療の発展を目指す試みが始まりました。プロジェクトは貧しく小さな公立施設で始まりましたが、私たちが身に付けた知識を、次に待っている国へと伝えていけるのはうれしいことです。日本からは新しいアイデアやリハビリに役立つ器具の支援も受けたので、どんどん活用していきたいですね」と当時のプロジェクト責任者であり、現在もリハビリ専門医師として勤務するパトリシア・メンデスさんは言う。

大きな窓ガラスの明るいろりりリ教室で、色鮮やかなおもちゃ、楽しみながら使える日本製のトレーニングマシンで、子どもたちが笑顔で医師と遊んでいる。隣室では中南米の医師を招いて神経系治療のセミナーが行われていた。日本人が去った後もチリ人職員の意味が生き続け、そこから新たな広がりを見せられている。



「身体障害者リハビリテーションプロジェクト」。INRPACはチリ唯一の国立小児身体障害者リハビリテーション病院。